

— 書 評 —

中嶋隆蔵著

『莊子——俗中に俗を超える』（集英社）

（東京大学助教授）池田 知久

著者の中嶋隆蔵氏は、現代に突如としてよみがえった「莊周」であり「郭象」である。あるいは三位一体というべきであろうか？ 著者は終始「莊周」「郭象」と一体になって読者に語りかけ、それらを客観化・対象化することはあまりない。だが、その「莊周」が本当の莊周でなく、その「郭象」にも問題があるとすれば、本書で著者が語りかけているのは著者自らの思想ということになるが、『莊子』という題名の書としてそれでよいのかどうか、いささか疑問であろう。

著者自らの思想というのは、こうである。——「是非いずれをも、あるがままに受け入れざるをえな」い（p. 109）、「これ（運命一評者注）をあるがままに容認するとき、人は、それぞれに固有する自然性を全うして、その天年を窮めることができる」（p. 151）、「一切を在るがままに受け入れ、これに全面的に随順するところ、生を悦び死を惡む感情など、きれいさっぱりと関心の外に忘れ去られてしまう」（p. 171）、「一切を在るがままに容認し、それに全面的に随順する以上、すべてを分別の下に考えようとする世俗の価値、人間の知に対しても、これを在るがままに認め、これに随順していくほかはない」（p. 218）、等々。要するに「一切を肯定し一切に随順」せよ（p. 234）というのである。

著者はこれを郭象を通じて見た莊周の思想だといって解説する。しかし実際の『莊子』にはこのような単純でみすばらしい思想は存在しない（拙著『莊子』上・下（学習研究社、1983・1986）を参照）。また郭象の思想の解説としても、これがその多面的で複雑な内容を立体的にとらえること

に成功しているとは私には感じられなかった。例えば、上引 p. 109 の郭象注の原文は「夫の是非なる者は、群品の無き能わざる所なるを明らかにす。故に至人は両つながら之れに順う」であり、ここに至人が群品の是非の両者に順うとあるのは事実である。けれども、郭象は主観的には、至人と群品を同一平面上にあるものと見て、至人が彼らの是非を「肯定し」「容認する」といった形で彼らに対して積極的な関わりを持つべきことを主張している訳ではない。なぜなら、郭象注は続いて「理に是非無きも、惑者は以って有りと為す。此れ有る無きを以って有りと為すなり。惑心已に成れば、聖人と雖も解く能わず。故に之れを自若に付して、強いて知らしめざるなり」と述べて、是非の惑心を自若に付することを提案しているからである。とすれば、「至人は両つながら之れに順う」も、これらと整合性を持ちうる方向で解釈されなければならないのではないか。

以上に見たとおり、著者は「郭象」の「莊子」をむりやり「一切を肯定し一切に随順する」のワン・パターンとして押さえこんだ。その腕力の強さには敬服するが、しかしここには多面的で複雑な郭象思想の諸要素間の関係づけなどによる立体的な再構成はない。あるのは、ただ郭象思想の不当な単純化と平板化を敢行する著者の姿のみである。そして「一切を肯定し一切に随順する」が、実際の『莊子』と大いに異なるのみならず、さらに郭象注とも必ずしも一致しないのであってみれば、その責任は莊周にも郭象にもなく、これを「六朝時代の莊子注釈の白眉」とか「一貫した注釈…は、すこぶる迫力に富む」（p. 261）とか持ち上げて読者に語りかけた著者が負うべきものであろう。

大体、「一切を肯定し一切に随順する」者が何かある特定のことを主張したり否定したりするであろうか。私には「一切を肯定し一切に随順する」を口に言うことは、思想としてはほとんど何も言

わないに等しいとしか思われぬ。ところが、莊周も郭象も何かを言っているのである。著者は、p. 180, p. 188 と pp. 254～257 において、このテーゼの無力さや矛盾について語る。これはしかし客観的には、これで莊周・郭象をとらえることができないことを無自覚裡に語っているのではなからうか。

それに、ワン・パターンで「郭象」の「莊子」をむりやり押さえこむから、本書はいたるところで論理的な破綻を来す。この破綻の存在は、郭象思想がこれでは押さえようにも押さえられないことを示しており、その多面性の再構成に著者が成功していないことを証していると考えてよい。例えば、著者は p. 54 で「世俗の価値観を全面的に肯定する人々には、このこと（莊子の思想一評者注）がなかなか理解できない」というが、後者は上記のテーゼと異なるのであろうか。また p. 66 に「莊子は、…生命を保全すべきことを説く」とあり、同時に p. 67 に「死と生を截然区別し、生を欣び死を厭う心が、じつは、人間から自然の徳を失わせ、人間を道から乖離させるものではないのか」とあるが、「生命を保全すべし」という主張と「生を欣ぶこと」の否定とは両立するものであろうか。p. 75 では同じページの中に「道の立場からすると、そうした物の世界の差別（盈虚衰殺一訳者注）など、もともと存在しない」と、「一切の事象にあまねく道があることに気がつくなら、盈虚衰殺といっても、いずれも道の現われでないものはなく」とが暢気に同居させられている。p. 215 で「人の心で天の道をあれこれ分別するのが凡俗であり、人の心を差し挟まず、天の道のままに任せるのが、「真人」なのである」、p. 231 で「『大宗師篇』は、…人の立場ではなく、天の立場に立つべきことを説き明かす」といいながら、p. 216 では「天の立場も人の立場もともに受け入れ、両者いずれにも随順していくことこそ、まさしく「真人」である」ともいう。こういう超論理

には、私はもうついていけない。さらに p. 62 では「あらゆる累害から免れるには、…万物が、そこから生まれ出てくるもっとも本源のところに同一化して、一切万物を余すところなく超え出ることが不可欠である」と述べて「道」の超越性を語りながら、p. 219 では「大塊とも呼ばれるそれ（「道」一評者注）は、人が人として在り、君主が君主として在り、天が天として在ることの根拠であるが、だからといって、それはこれら一切に超越して在る唯一者といったものではない」のごとくそれを覆してしまう。一体どうなっているのであろうか？ 勿論、以上に挙げた例の中には著者が郭象注をそのまま日本語訳した個所もあるので、全てが無根拠という訳ではないけれども。

著者は、『莊子』を解釈したものの中で郭象注は特にすぐれているという（p. 81, p. 261）。しかしながら、これは誤解といわなければならない。『莊子』や郭象注を少しでもかじった経験のある者ならだれでも知っているように、それは『莊子』の原義を明らかにしたものというよりも、むしろ注の形を借りて自己の思想を語ったものである。だから、これは郭象思想をとらえようという時には格好の資料ではあるが、『莊子』を読もうという時には不適当な注なのである。なるほどこれ（特にその「知足安分」思想）が、中国でも日本でも前近代社会のある要求を満足させるものとして重視されたことがあったのは事実であるが、しかしそのことはそのまま『莊子』の注としてすぐれていることを意味しない。現代に生きる我々としては、このように作為された前近代の郭象評価をいつまでもおしいただく必要はないと思う。大雑把に言って、清代考証学以前の注には方法論的に郭象と同じような注釈者の主客未分があるけれども、それでも郭象より『莊子』の原義に接近している注は決して少なくない。例えば、郭象より少し早い司馬彪の注（輯本がある）、宋代の呂惠卿・林希逸・褚伯秀、明代の羅勉道・朱得之・陸長

庚の注などがあり、清代にはすぐれた注が相当多数書かれている。このように郭象注以外に『莊子』の解釈としてすぐれたものがいくらでもあるにもかかわらず、著者がそれに言及しないのは全く理解に苦しむ。

また本書は、『莊子』の内篇7篇だけを（事実上）莊周の自著とみなして、外篇15篇・雑篇11篇を削去してしまった。その理由を著者はp.86で「六朝から隋唐時代にかけては、内篇こそ、莊子思想の核心を説き明かしたものだとする、ほぼ共通の理解があった」からだと述べる。だが、これは論点のすりかえである。『莊子』を内・外・雑篇などから成る52篇に始めて整理したのは、前漢末の劉向であったと推測されるが、すでにこの時から『莊子』の中では内篇が最も重要だとされていた。そうでなければ、内・外・雑などの分類はそもそも無意味であろう。「六朝から隋唐時代にかけて」も、この内篇の意味づけを同じように確認しているにすぎない。外・雑篇を『莊子』からはずしてよいなどとは、だれもいってはいないのである。それに外・雑篇は、内篇にくらべて価値が落ちるとはされながらも、唐代の韓愈や宋代の蘇軾が雑篇の一部を莊周の自著でないといって疑う以前には、全てが莊周の自著と信じられていた。だから、著者が内篇だけを莊周の自著とし外・雑篇を削去するための理由づけとして、内篇が重視

されていたなどという始めから分かりきったことは理由にならないのである。そして、著者が内篇7篇を強引に莊周の自著と認めたことが、先に述べた思想内容の解説におけるあのワン・パターンにつながったのではないかと私は憶測する。正しくは内篇7篇だけに限っても、『莊子』はB.C.300～B.C.150の約150年をかけて多数の道家の思想家たちが書きつづった文章の集成である。それをむりやり1時1人の作とみなして、それに見合う単一の内容を求めようとしたから、そのような結果に終わったのではなかったか。現代の『莊子』研究としては、劉向～郭象が設定した古い枠組み（内・外・雑篇の区別など）をも自由に批判の対象にしつつ、『莊子』33篇の全体を戦国後期～漢代初期の思想史の中に然るべく定位させながら、従来以上に鋭くかつ深く分析することが課題でなければならない。

最後に一言。著者は「あとがき」p.261で「なかに、…ついつい妄言に及んだところもないではない。ひたすら妄聴していただくほかはない」と述べている。これは『莊子』について書く者の用いる常套句であるが、私は同じ世代の若い研究者がこのようなことばで己れを糊塗するのを好まない。君よ、妄言するなかれ、我ら妄聴せず。

（1984年12月刊、四六判、261頁、1400円）

●38年間、総計3万頁を超える一大文献の総目録

アジア経済旬報総目録 (1947-1985)

1985年3月、1326号をもって終刊となった『アジア経済旬報』の唯一の総目録（執筆者索引付き）。戦後の日中関係史を見る上で必携。

* 中国研究所創立40周年記念事業の一環として特別刊行

● B5判・上製250頁
定価 8,000円
(〒300円)